

言語における人間の尊厳と自由

—フンボルト言語哲学を手がかりに—

The Dignity and Freedom of Human Beings in Language

—With Regard to Humboldt's Philosophy of Language —

幸津 國生

文化の形成は、「人間的なもの」の最も高度の次元における展開であろう。その中において、言語は特別の位置を占めているように思われる。というのは、言語に決定的な意味において「人間」そのものを見るかどうかは別として、およそ「人間的なもの」の発露は言語を介して行われると言っても過言ではないのであり、そこに「人間」という存在者の根源が何らかの意味で示されていることは確かだからである。

ところで、このように言語を捉える場合、考慮しなければならないのは、言語が現実には言語一般ではなくて、諸言語として存在するという点である。そこで言語の意味を考えるためには言語の多様性と言語そのものを区別しつつ、それらの関連について論究しなければならない。ここでは、或る特定の文化という基盤に立つ或る特定の言語を吟味することを通じてしか言語一般には遡れないわけであるが、その際の言語一般への、したがって文化一般への態度は同時に他の言語への、したがって他の文化への態度を当然含んだものとならざるを得ない。かくて言語の意味の検討には、文化一般に対するわれわれの態度が前提されるのである。このことは、われわれに各言語の、したがって各文化の固有性の承認を要求するであろう。ここに各言語間の、したがって各文化間の相互承認が成立するのである。これは、言語ないし文化のレベルにおける人権の相互承認であると言えよう。われわれは、ここに示された文化相互の間の共同生活のルールとも言うべきものへの原理的

考察から学ばなければならない。

このような視点のもとで言語の意味を検討するにあたって、その手がかりとなるものに、フンボルトの言語哲学がある。彼は、以下に見るように、その言語哲学を常に〈人間の尊厳と自由〉(亀山健吉)という視点から捉えた。それ故、われわれの文脈から見れば、彼の言語哲学における人間観を「人権」の思想の一つの展開として理解することが許されるであろう。

フンボルトの多彩な営みの核心には〈人間の尊厳と自由〉がある。「人間性の尊厳に対する確信」、「個人の自由を確立しようとする念願」、「ヒューマニズム」が「フンボルトの生涯をその最深部に於いて統べているもの」であり、彼の古典への愛好、政治行動を貫くものであり、「彼の言語論の根底もそこに見出される。」(亀山 1978a : 260)。すなわち、〈人間の尊厳と自由〉への「確信が彼の言語論の隅々に至るまで浸透している。」(同 1978b : 139) このことは、彼の言語学習の目標が「〈人間の可能性の態様〉、〈理念の展開の仕方〉、〈思考感受の体系〉に触れること」(同 1978a : 238)にあることにも示される。かくて、フンボルトは「言語という人間にとって最も根源的な活動を考察するためには、言語に対する新鮮な驚嘆の念を保ち続け、それと並んで、人間の尊厳と自由に対する揺ぎなき確信を懐き続けなくてはならぬことを教えてくれる」(同 1978b : 153)のである。ここには、〈人間の尊厳と自由〉と言語との関係について、これがいかなるものであるのかを

めぐって問題が提起されている。すなわち、前者は後者として表現され、自己を確証するのであり、後者は前者を基盤とするという点をめぐって深い洞察が示されている。一般的な見方からすれば、両者は無関係であるかのように見えるかもしれない。少なくとも言語学という専門分野からすれば、言語とは、〈人間の尊厳と自由〉というような思想的立場から一応離れて探究されるものであろう。とりわけこの立場が政治行動との関わりにおいても主張されるとすれば、なおさらのことであろう。ところがわれわれは、フンボルトにおいて、むしろ両者の緊密な関係についての主張に出会う。われわれがフンボルトから何かを学ぶとすれば、まずこの点を措くことは許されないであろう。本稿では、両者の関係の意味について考えてみたい。

ところでこの〈人間の尊厳と自由〉の立場は言語論においては、言語がどの言語においても「精神活動の所産」(同 1976b: 152)である、という点に示されるであろう。というのは、フンボルトの言語論は、次のようなドイツの「観念論哲学の図式的構造」のもとにあるからである。すなわち、「主体」が自己自身を〈定立〉するのであり、定立されたものは、精神活動によって「生み出された」という意味では客観であると同時に、「主体の活動」であるという意味では主観的である(同参照)、という構造である。

このことは、言語が精神活動の一つの例として取り上げられただけであるか(後に言及する亀山 1976b: 155に引用されたハイデガーの解釈を参照せよ)のような印象を与えるかもしれない。その場合、フンボルト自身の術語でもある「精神」の意味が問われなければならないのはもちろんであるが、この意味が上の図式的構造のもとに理解されるのだとするならば、この点を問うこと自体はさほど問題にはなりえないだろう。より重要なこととして、われわれがフンボルトの言語論から何

を学ぶうるのかを明らかにするために、「精神」あるいは〈人間の尊厳と自由〉がとりわけ言語論において展開されることの意味が考察されなければならないであろう。このことは、同時に、ドイツ観念論の渦中において、言語を主題とすることによって、何が明らかにされたのか、という点を問うことになる。この問いをめぐって他の思想家、すなわち、ハイデガーとチョムスキーによるフンボルトへの言及を参照しつつ、考えてみたい。というのは、それぞれの論点について彼らとの対比がフンボルト言語哲学の独自性を示すと考えられるからである。

ここでは、フンボルトの「精神」概念が関わると思われる次の三点が取り上げられる。

- (1) まず、「精神」の立場から見た言語論、すなわち、「精神」による自己自身の定立のうちに言語の本質を見るという言語論の意味について考察されなければならない。これをめぐって、フンボルトの立場を人間中心主義的であるとするハイデガーによる批判が検討に値する。
- (2) 次いで、言語の相違性へとフンボルトの思索が向かったことの意味が考察されなければならない。この点に関しては、普遍的な言語の存在という自己の立場にとっての一つの拠り所をフンボルトのうちに見出したチョムスキーの見解の検討が課題となる。
- (3) そして最後に、これらの論点を踏まえつつ、フンボルトにおいては、言語が「有機体」として捉えられるのだが、この把握の意味について考えることによって、われわれがこの言語哲学から学ぶべき方向を明らかにしたい。

1. 言語の本質

フンボルトは、言語を「出来上がった作品」(エルゴン)ではなくて、「活動性」(エネルギー)だとする(Humboldt 46; 同邦訳 73; 亀山

1976b:152参照)。ここに〈人間の尊厳と自由〉と言語論との関わりが、言語の本質の問題をめぐる提起されている。すなわち、言語が人間にとって決して外から与えられたものではなくて、人間自身の活動そのものだ、とする考えがここに現れている¹⁾と言えよう。

これに対して、これが「ギリシャ的なものではなくて、むしろ近代的なもの」(フンボルト訳注 544)、例えばライブニッツのヴィス・アクティヴァのような「近代的な意味における主体の力に転化してしまっている」(同)ものになってしまっているのではないかとし、ここに人間中心主義の捉え方を見て、これを「形而上学」だとして批判するハイデガーの立場がある。この批判は、それが当たっているかどうかは別にして、確かにフンボルトの言語哲学の核心を衝いたものだと言えよう。ここで検討されるべき問題は、ハイデガーの批判にもかかわらず、〈人間の尊厳と自由〉のためには、「形而上学」の立場が不可欠なのではないか、という点にある。ハイデガーが言うように「すべてヒューマニズムは、形而上学的」(Heidegger 1949:13; 同邦訳 18)であるとすれば、むしろそこに留まることが必要なのではないか。少なくとも、フンボルトにとっては、そうではないか。ハイデガーのごとく、「形而上学」に連なる言葉 Sprache を超える語り Sage としての「存在の言葉」に向かうという場合(亀山 1966:53、同1976a:112参照)、〈人間の尊厳と自由〉を守ることの哲学的基盤が否定されてしまうことはないのだろうか²⁾。

主客の対立を前提する「形而上学」の克服というハイデガーの枠組みの中で「世界時代的」にこの「形而上学」を超えるもののみが、彼の関心を惹くものである。ドイツ観念論は、この「形而上学」の中で「主観性の哲学の完成」として最も高められた」(亀山 1966:50)ものと位置づけら

れる。ヘルダーリンによる対立の契機の強調には、彼が「ドイツ観念論とは異質的なものに変貌する素地が潜んでいる」(同 51)。そのような彼の精神活動は、「人間の側から自然に向かうという方向を反転して、自然であれ、神であれ、根源からの語りかけに、耳を澄ませ、聴くべく待つという態度」(同 52)を採らせた。このようなヘルダーリンの中にハイデガーは、「ドイツ観念論の枠を破って、世界時代的な意味で形而上学を克服しようとするたった一人の同志を認めた」(同)。

共通の視点に基づいて、シェリングの仕事の中に「である」の形式を用いて「がある」を明らかにすること、すなわち、「有るもの・有ること」の総体からわれわれ自身が問いかけていること、中心的課題としての言語の問題を見ることが出来る(同 1975:106; 同 112参照)。

ここに「形而上学」の克服の可能性という方向で言語を位置付ける立場が捉えられ、それとの関連において或る思想家の言語論が評価される³⁾。

フンボルトにおいてこの点に関わるのは、言葉を超えるものへの予感を持つことが言語研究者には必要とされる、という主張である。すなわち、「形式という王国だけが言語研究者の探求すべき唯一の領域ではないということ、および、言語を尋ねようとする者は、言語の中には形式よりも一層高く、かつ、更に根源的なものが秘められている事実を見誤ることだけは少なくともしてはならないこと、そして認識によってこういう形式以上の領域へ到達することができぬにせよ、研究者は心中にそのような領域が存在することについての予感だけは持つべきであるということ、これらの点こそ銘記すべき事項に他ならない。」(Humboldt 166; 同邦訳 263f.。なお亀山 1976a:113参照)。だが、このものは、再び言葉によって制約され、これによって捉えられる。すなわち、「言語を超越していながら、それでいてしかも、本来的には

言語によって制約されているような領域の存在を、人間は本質的に予感するもの」であり、「この領域を探求してその活動を促す手段は言語以外にはない」のであり、「言語が技術的にも感覚的にも完成の度を加えるにつれ、この領域の中のより大きな部分が言語の領域へと変換され得るものである」(Humboldt 177f; 同邦訳 278)。ここに、言語と人間との関係における転回が見られる。言葉は、いわば単なる意志疎通の手段であるのではなくて、それ自身を超えたものと人間との間の通路となるのである。個々の言語の研究を通じて、これらの言語として現れてくる普遍的な存在が捉えられ、このような存在へと人間は導かれていくのである。すなわち、「我々は存在そのものと、[その果す機能としての] 活動とを区別するのであり、眼に見えぬ原因としての前者を、現象として眼に映じ得る思考、感受、行為に対比させて考えるものなのである。しかし、存在と言っても、我々は、これとかあれとか呼び得る個体の個別的な存在を意味しているわけではなく、個的なものそれぞれの中で規定する力を発揮しつつ現れてくる、普遍的な存在を指しているのである。性格の描写を綿密に行なおうと思えば、こういう存在こそ研究の行きつくべき終点であることを銘記し、こういう存在そのものを絶えず眼前に彷彿とさせておかななくてはならない。」(Ebd. 178f. ; 同 280) このザインの把握の仕方には、ハイデガーが『存在と時間』の中で力説している「存在」と「存在者」との峻別が「いわば予見したような形で述べられている」(フンボルト訳注 545) と言うことができる。言語は、そのような存在と人間とを結びつけるのである。

このことについて、ハイデガー流に「形而上学」克服の可能性を見るのも一つの方向であろう。しかし、必ずしもそのような方向が唯一であるというわけではないと思われる。〈人間の尊厳と自由〉

をフンボルト言語論の根底に見る立場を採ることによって、別の方向の可能性がわれわれに開かれるのである。それは、とりわけハイデガーが解釈し批判するのは逆にフンボルトが精神活動の多様性を言語において見たということ、すなわち言語の多様性へとその思索を向けたことにある。ここに〈人間の尊厳と自由〉と言語論との関わりのもう一つの側面が示唆されているのである。

2. 言語の相違性

言語の相違性は、価値の上下ではなくて、〈世界の見方〉の相違に基づくにすぎない(亀山 1978 a : 247参照)。言語は、「精神が自己の持つ力の内的な活動によって、精神自身と対象との中間に定立する真正な一箇の世界である」(Humboldt 176; 同邦訳 278)。この「世界」の個性が、言語の相違性を生み出すのである。これは、〈人間の尊厳と自由〉の立場が、言語の多様性の認識に向かったことを示している。それは個々の言語の中に、いわばこの立場の表現を見るのであり、仮に未開とされる民族の言語であっても同様である。すなわち、「たとえいかに未開な民族であろうとも、それぞれの民族の持つさまざまな概念の中にはもちろんのこと、その言語そのものの中にも、人間が本来的に備えている無制限な形成能力の領域にふさわしいだけの、それなりにまとまった全体性が潜んでいるものなのである。」(Ebd. 28 ; 同 42 f.) したがって、もしこのような全体性を認めないようなことに対しては、〈人間の尊厳と自由〉に反するものとして思想的にも、学問そのものとしても批判される。「何らかの言語—それがたとえ極めて粗野な蛮人の言語であろうとも、—に対して、それが劣った言語であるという断罪を下すというようなことなど、他の人はともかく、私には決してできない芸当である。こんな判断を下すことを、私は、固有の天賦の素質を備えた人間性

の尊厳を汚すことであると考えればかりでなく、言語に対する思索と経験によって得られる正しい言語観のどんなものとも背馳すると断ずるのである。」(Ebd. 256 ; 同 394)

ところで言語の多様性の問題に関わって、フンボルトの言語論に自らの言語論を重ね合わせて理解する立場にチョムスキーのそれがある。チョムスキーがフンボルトに見出したのは、「〈生成文法〉の支柱となる言語学者」ばかりではなく、「自由を説いた先人」である、という(亀山 1978a : 261、なおChomsky 1966 : 24ff.; 同邦訳 32以下をも参照)。ここにチョムスキーにおける〈人間の尊厳と自由〉と言語論との関わりが示されているわけだが、この関わりはとりわけフンボルト言語論に関する彼の解釈にはどのように現れているのだろうか⁴⁾。

チョムスキーは、言語の多様性に関して上のフンボルトの立場に対して、普遍性を優先させて次のように解釈する。すなわち、フンボルトは、言語の変異性についての考えにもかかわらず、「普遍的である体系、人間の独自の知的属性をもっぱら表現する体系がいずれの人間言語の根底にも所在し、発見されると確信した」(Chomsky 1972 : 76 ; 同邦訳 124-125)、あるいは、より強く言えば、「フンボルトの『言語形式』は一特種言語における発話の産出ないしは知覚のあらゆる個々の行為を拘束し、さらには、もっと一般的に、文法形式の普遍的諸相が、可能なかぎりの言語の類を決定する」(Chomsky 1966 : 24, 90 (Note 48)、同邦訳 32および119-120参照)、という解釈である。しかし、この解釈には問題がある。というのは、フンボルトの立場においては、チョムスキーの解釈における多様性から普遍性への遡及という方向よりは、もちろんそのような普遍性が求められながらも、むしろそれがどのように多様に展開するのか、を見るところに重点があったのではな

いかと考えられるからである。つまり、普遍性と多様性との連関そのものが問題なのである。チョムスキーは、フンボルトの次の論述をどのように捉えるのだろうか。「ある言語を取り上げて考察する場合に、その言語を用いる民族が、人間の営む内面形成のありとしあらゆる段階をすべて経過したというようなことが仮に想定されるとすれば、その言語を見さえすれば、[民族および言語に関する] すべてのごとが完全に一目瞭然となり得るのかも知れない。しかしそんなことがあり得るはずはないのである。」(Humboldt 178 ; 同邦訳 279) ここでチョムスキーは、或る意味でハイデガーと同様に、フンボルトとは丁度逆方向に向いていると言えよう⁵⁾。

ただし、言語の多様性へと思索の歩みを進めたフンボルトにも制約があった。それは他ならぬ日本語研究において明らかにされてきたようである。すなわち、日本語については、彼が〈主客の対立〉を前提する限り、同一の代名詞が一人称と二人称との間を行ったり来たりすることに思い及ばなかった(亀山 1978a : 254。さらに同 1976b : 150-151 ; 同 1984 : 617 ; フンボルト訳注 557-558 参照)、という。このようなことは、「単に理解を絶しているばかりでなく、原理的に許されない〈混乱〉以外の何ものでもなかった」(同 1984 : 664) のである。このような言語との出会いは、フンボルトをして学問上の課題の設定、すなわち、空間概念と人称表現との関連性はそもそも何であるか、という課題の設定を触発し、導き出したかもしれないものであった(同 634参照) ようである。しかし、ここには、諸言語について該博な知識の持ち主のフンボルトでさえ、衝突せざるを得なかった哲学上の立場の限界が現れているということになる。われわれの問題設定から見て、彼の哲学にこの限界がある以上、〈人間の尊厳と自由〉という立場そのものが見直されなければならない

のかどうか、が検討されなければならないことになるだろう。少なくとも諸言語理解の枠組みだけについて言えば、上の前提のもとでは、屈折語が「理念型」として設定されるのだが、諸言語の同等性が指摘されているとはいえ、一つの言語を理解する枠組みの制約はどのように捉えられるのか、が問われなければならない。

3. 言語の「有機体」論的把握の意味

言語および思考の社会性の把握において、言語を主題化したことの意義が示される。あるいは、この主題化の故にこそ、言語および思考の間主体性が捉えられた（亀山 1976b : 147ff. ; 同 1978b : 147参照）。すなわち、言語においては、単に物質の対象ではない対象である汝が捉えられる（Böhler 1985 : 250参照）。

フンボルトにおいて対比されるエルゴンとエネルギーは、アリストテレスにおいてポイエーシスとプラクシスという対に対応するものとしてエルゴンとエネルギーという対が捉えられるという文脈で理解される（Böhler 1985 : 249f. 参照）。そこでは、行為の目的と意味とが行為そのものの外の行為によって産みだされた所産のうちにあるか、それとも行為そのものうちにあるか、という区別が問題になっている。ここでは言語が「精神」が自己自身を産み出し、同時にこのことによって産み出された所産であるところのものであることの意味が示されている。すなわち、言語は、いわば自己目的としての「精神」の働きそのものである。ここに言語は、次のような「有機体」として把握される。すなわち、「どんな個々のものでもすべて他者に依存しており、すべての個々のものが、全体を貫徹している唯一の力によってのみ存立している。」（『言語展開の異なった時期に関連した言語の比較研究について』亀山 1978b : 140に引用）

これは、フンボルトにおける言語がハイデガーによって次のように批判されるようなものではないことを示している。ハイデガーはフンボルトが言語の本質に関する考察において、その「存在の言葉」としての本質に向かうのではなくて、多様な言語への考察に向かうことによって人間へ向かうと批判する。すなわち、「[フンボルトの] 言語へ到ろうとする道筋は、言語としての言語によって規定されてはおらずに、人間の歴史的・精神的展開の全体を、その総体性において、と同時にそれぞれの個性においても、歴史的に表現しようとする努力によって規定されている。……精神の力の表現のされ方は多種多様であるから、世界の把握も各種の源泉から汲み取ることができる。フンボルトは[世界把握の] 主要な要因の一つとして言語を認識に選んだにすぎないのである。……フンボルトの言語への道は、人間へ向かう方向を取っている。そして、実は言語を通り抜けて言語以外のもの、すなわち人類の精神的展開の基礎づけ並びに表現を目指しているのだ。こういう視点で把握された言語の本質は、すでに言語性（Sprachwesen）というものを開示してはいないのである。」（Heidegger : Der Weg zur Sprache. In : Ders. 1959 : 248f. 亀山 1976b : 155に引用）だが、フンボルトにおいては、多様な言語に向かうことは、「言語を通り抜けて言語以外のもの」に向かうことではなくて、言語そのものに向かうことであり、そこには言語において捉えられる精神、あるいは精神としての言語が見出されるのであって、言語と精神とを分離することはハイデガーの立場の主張にすぎない。

ドイツ観念論の中でも言語を主題とすることによって、ハイデガーの示す方向とは別の形でハイデガーが言うところのその「形而上学」的性格の克服の可能性が生じたと言えないであろうか。精神の立場に立ちつつ、同時に人間中心主義を脱却

することは可能であろうか。この点に関して、フンボルトが言語を有機体として捉えていることをめぐって次の指摘が注目される。すなわち、ゲーテの形態学との類比において自然と精神との統一を言語のうちに見ているという指摘である (Böhler 1985: 254 参照)。ここにいわば脱人間中心主義の「形而上学」の可能性が示されていると考えられるのである。個々の言語の内部における有機体が見られるばかりではなく、諸言語の全体の関連が有機体的であり、それが人間を含む全自然と対応し、そこに自然と精神との統一が捉えられるならば、言語は人間中心主義を脱することはできないであろうか。

これと同様に、チョムスキーも「言語」の枠に留まるといふ点ではハイデガーとは別の仕方ではあるが、しかし、普遍的な言語への遡及を目指すかぎりにおいて、言語における普遍性と多様性との関連を見ないという点では共通しているように思われる。これらに対して、フンボルトにおいてはこの関連こそ、〈人間の尊厳と自由〉の視点から言語が主題とされたが故に捉えられえたのであり、人間の側からであるにせよ、人間中心主義を越える方向が捉えられえたのだと言えないだろうか。この方向において、われわれは、この言語哲学の持つ一つの可能性を見出しうるのではないだろうか。

フンボルトの言語論が言語の哲学的考察を目指したものであるとして単なる思弁的な言語哲学であるのではなく、諸言語についての実証的な研究を踏まえて展開された言語哲学であることは、語学の天才フンボルトにしてはじめて可能であったであろう。哲学的な言語論と歴史の実証的な言語論とは、彼以後分離せざるを得なかったようである。このことは、既にヤーコプ・グリムとの学的交流において明らかになったことである。すなわち、この交流において明らかになったのは、「フンボ

ルトが言語哲学者として論理の場面で発想しているのと、グリムが歴史的言語学者として歴史の地平で学的営為を行っているのとの違い」、すなわち「両者の学問の展開される次元と方法が本質的に異なっている」(亀山 1981: 233) ことだったのである。

注

- 1) この命題が創造神の完成した贈り物としての言語というような合理主義的一神学的な言語起源理論の誤謬を強調している、という指摘は参考になる。Böhler 249f. 参照。
- 2) もちろん、ハイデガーにおいても、ヒューマンイズムへの反対は人間の尊厳に反対するものではない、とされているのではあるが、人間の尊厳をどのようにして十分に守っていくのか、必ずしも明らかではないように思われる。Heidegger 1949: 21; 同邦訳 28 参照。
- 3) この点に関してフンボルトの言語論は、言語哲学における〈コペルニクス的転回〉を含むものと見なされる、という指摘が注目に値する。すなわち、フンボルトにおいて言語哲学はもはや単に言語についての哲学活動ではなくて、言語の(主格属格)哲学活動である。このことによって言語哲学は、周辺から哲学活動一般の中心に登場することになる。これは、クロウチェ・ハイデガー・ガダマーらにおける20世紀哲学において初めて完全に展開された発展の先取りである。Böhler 236f. 参照。
- 4) この点に関するチョムスキーの態度については、その政治批判に見られる社会的関心とその言語論における没社会的な方法との間のギャップが指摘されている(田中 9 参照) 点が別に検討されるべきである。もし、この指摘が正しいとするならば、チョムスキーはフンボルトにおける〈人間の尊厳と自由〉と言語論との関わりを捉えていないことになる。
- 5) この点に関して、フンボルトの言語論の動機が「多様なすがたをとる言語の意味を考えてみる」(田中 108) ことにある、という指摘が支持される。チョムスキーにおいて英語という一つの言語のうち

に普遍性を見出しうるとする意味で「英語帝国主義」(同 112参照)が見られるとするならば、フンボルトの立場は、これから遠く離れたものである。

- 6) Böhler 250 参照。
- 7) Böhler 249f. 参照。
- 8) Böhler 254 参照。

文献目録

第一次文献：

Humboldt, Wilhelm von 1968: Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts. In : ders. : Gesammelte Schriften. Hrsg. von Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Band VII. Erste Abteilung: Werke. Hrsg. von Albert Leitzmann. Siebenter Band. Erste Hälfte. Einleitung zum Kawiwerk. Berlin: B. Behr's Verlag 1907. (Photomechanischer Nachdruck: Berlin: Walter de Gruyter & Co. /フンボルト、ヴィルヘルム・フォン 1984『言語と精神カヴィ語研究序説』亀山健吉訳、法政大学出版局 1-530 ; 訳注 531-600.)

研究文献：

Böhler, Michael 1985: Nachwort. In: Humboldt, Wilhelm von: Schriften zur Sprache. Hrsg. von Michael Böhler. Stuttgart. 223-254

Chomsky, Noam 1966: Cartesian Linguistics. A Chapter in the History of Rationalist Thought. New York and London. /チョムスキー、ノーム 1976『デカルト派言語学 合理主義思想の歴史の一章』川本茂雄訳、みすず書房

Ders. 1972: Language and Mind. New York-Chicago-San Francisco-Atlanta 1968. Enlarged Edition. /同 1976『言語と精神』川本茂雄訳、河出書房新社 新装版 1980. '1990.

Heidegger, Martin 1949: Über den Human-

ismus. Frankfurt am Main '1991 /ハイデガー、マルティン 1958『ヒューマニズムについて』桑木務訳、角川文庫

Ders. 1959: Unterwegs zur Sprache. Pfullingen '1990.

亀山健吉 1966『ハイデガーとヘルダーリン』『実存主義』35 理想社. 48-58

同 1975『シュリングにおける言語の問題』『実存主義』71 以文社. 101-115

同 1976a『ハイデガーとフンボルト』『実存主義』77 以文社. 108-114

同 1976b『言語の民族性—ヘルダー・フンボルト・ヴァイスゲルバー—』『言語と倫理』日本倫理学会論集 理想社. 135-166

同 1978a『フンボルト 文人・政治家・言語学者』中公新書

同 1978b『言語比較の方法について—フンボルトの場合—』『理想』539 理想社. 139-153

同 1981『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとヤコブ・グリムの学的交流について』『日本女子大学紀要 文学部』

同 1984『フンボルトの日本語研究』上掲フンボルト、ヴィルヘルム・フォン『言語と精神 カヴィ語研究序説』付録 603-666

田中克彦 1990『チョムスキー』同時代ライブラリー 29、岩波書店